海賊からの便り－11

2014/05/01

わしは運が良かったからな
～海賊とよばれた男との一問一答～

宮下佳廣

去る４月９日、「昭和偉人伝」(BS 朝日放送)で出光佐三が取り上げられました。生前の姿に懐かしさを覚えると同時に、私が新入社員として赴任した徳島出張所で、直接創業者と言葉を交わした思い出が蘇りましたので、みなさんに紹介いたします。

当時、店主と呼ばれていた創業者は 80 歳半ばで、社業から離れ自治体や企業での講演の合間を縫って全国各地の事業所へ立ち寄り、社員とスキヤキの鍋を囲むのが習わしでした。そのスキヤキ会の目的は、若い人が今考えていること思っていることを直接見聞きしながら自分の経営哲学を伝えてゆくことで、徳島に来た店主に一問一答する大役が入社２年目の最も若い私に回ってきました。店主の真ん前に座り緊張している私に、店主は、「今、考えていることを言ってみなさい」と言われました。そこで私は、「店主のようになりたい。そのためにはどうすればよろしいでしょうか？」と質問をしました。少し顔を上げて考えるような仕草を見せた店主は、**「わしは運がよかったからな。君にも運があればなれるよ」**と慈愛に満ちた声で笑いながら答えてくれました。しかし当時の私は、「運がよかった」という言葉が軽い響きとしか受取れず、何か拍子抜けしたというのが正直な気持ちでした。

後年、出光の社史や先輩の話から、店主が、石炭から石油へのエネルギー転換、イランの石油国有化の際に石油メジャーに挑戦した日章丸事件、世界初の 20 万トンタンカー出光丸の竣工等、当時の世界情勢、国内の経済動向、技術開発の進歩を商機と捉え、決断とリーダーシップで今日の出光発展の礎を築いたことを知りました。年を経るに従い、運は天から降ってくるものではなく、多くの苦労と努力の中から生まれてくるということが理解でき、「運がよかった」という言葉の重みがわかるようになりました。

私自身、今日までの人生を振り返るとき、良き人たちに恵まれたという運の良さと、努力は必ず実を結ぶことを実感しております。ここで、私が若い社員のみなさんにお伝えしたいことは、運を自分でつかむためには不言実行ではなく、大きな志を人前で言い切る有言しそれに向かって努力していくということです。自分の言い切った言葉の重みを噛みしめながら、一歩ずつ日々の目標を達成してゆけば、それが必ずみなさんの成長につながります。

感想・ご意見など ym2041@axel.ocn.ne.jp 迄、ご連絡いただけたら幸いです。

海賊からの便り－12

2014/06/01

目指すゴールは何か
～手段の目的化を防ぐために～

宮下佳廣

みなさんは、長野県栄村をご存知でしょうか？ 東北大震災の翌日に起きた震度6強の長野県北部地震で大きな被害を受けた人口2000人ばかりの過疎の山村です。
最近、この村で小水力発電に取り組むプロジェクトが始まり、私が参画している「鎮守の森コミュニティ推進協議会」がそのお手伝いのため、現地の会合に参加しました。

会合のメンバーは、村会議員、役場の現職員、元役場職員、自営業者、さらには都会からの移住者など、さまざまな人たちで構成されていました。当日の会合では最初に私達の活動を紹介し、続いて栄村の小水力発電プロジェクトの経過報告が行われました。この後、徐々に意見が出始め、次第に議論が白熱していきました。議論好きといわれる県民性と会議の進め方が不慣れなことも相まって、議論が拡散し、収拾がつかなくなる恐れが出てきました。その時、それまで静かに聞いていた都会からの移住者が「**そもそも、このプロジェクトの目的は栄村が元気になることではないのか？ 小水力発電はあくまでもその手段ではないのか？**」と発言しました。その一言で、収拾のつかなかったそれまでの議論が一つの方向に収斂していきました。その結果、村民の気持が一つになり、プロジェクトが一歩前進した手応えを感じました。

人は、案外目的を見失いがちであるとはよくいわれます。目の前の作業（手段）に集中するあまり近視眼的になり、ゴール（目的）を見失うのです。例えば、7年後に東京で開かれるオリンピックは大変楽しみですが、とかく金メダルの数が話題になりがちです。しかし、近代オリンピックの父といわれるクーベルタンは「オリンピックは、参加することに意義があり、目的は人間を創ることである。人生にとって大事なことは成功することではなく、努力することだ」と述べています。このように、「金メダルをとる」ことがオリンピックの目的ではなく、真の目的は、それに向かってのたいへんな努力を通して人として成長することにあると思います。

「手段の目的化」を防ぐ特効薬は簡単には見つかりません。栄村での会議の例からも、外部からの意見を聞くことも一つの方法です。しかし、もっとも大事なことは、みなさんが常に目的に照らして日常業務を確認することです。「そもそも何のためにやっているのか？」「目的からしてこれで良いのか？」という振り返ることに尽きると思います。
目的を達成するには、手段を実行するときは目の前のことに集中し、ときには立ち止まり「全体を俯瞰する」ことが重要です。それが個人だけでなく、職場内で、さらには会社全体で行われることが強い組織につながっていきます。

感想・ご意見など ym2041@axel.ocn.ne.jp 迄、ご連絡いただけたら幸いです。

海賊からの便り－13

2014/7/01

一億円だったら払えるのか！
～先輩の職場指導の大切さ～

宮下佳廣

先日、N社が関係する朝食会で、出光の天坊相談役（元社長）の講演会がありました。講演後、司会者からO.B.として現在の心境はと聞かれた私は、「今でも出光大好き人間です」と答えました。今回は、そのきっかけとなった若かりし頃の失敗談を紹介します。

私が入社2年目、営業担当として四国徳島の造船所で石油製品の商談を成立させました。久しぶりにその造船所を訪問したところ、普段は人影がまばらな構内にその日は多くの人が押し掛け、その前で社長が平身低頭して謝っておりました。やがてあちこちで怒声が上がり、やっと造船所の倒産という現実がわかりました。急いで営業所へ戻り、経理担当の先輩社員から不良債権処理の指導を受けた後、恐る恐る「会社に損害を掛けたので、私の給与から毎月天引きで弁済します」と自分の考えを述べました。それを聞いた先輩は「おまえ、**一億円だったら払えるのか**、自分のミスを給与で払おうなんてケチな考え方をするな、出光には**失敗は授業料**という言葉がある。この件は、一生お前の胸に刻み込んでおけ！」と一喝されました。この体験が、後に私が出光大好き人間になっていく大きなきっかけとなりました。

後年、地方都市に転勤となり、いきつけの居酒屋で後輩の社員と懇親を深めていた時、カウンターの隣で若いビジネスマンが女将さんに愚痴をこぼしておりました。聞くともなしに耳を傾けていると、「自分の担当している取引先が倒産したため、上司から回収出来ない分は給与から天引きするといわれたので、飲み代はしばらく待ってほしい」という内容でした。まさに、私の徳島での新入社員時代の経験と全く同じでした。しかし、会社側の対応が大きく違っておりました。私の場合は、上司ではなくわずか二歳年上の先輩が、**失敗は授業料**と言い放ったのです。

若い時の失敗は買ってでもしなさいとは良く言われることで、痛い目に遭う体験を通して、人は大人になっていくものです。この時、大きな影響を与えるのは身近な先輩です。千代田も若手社員が増えてきており、楽しみな反面、先輩が後輩を指導していく責任が問われています。そのために、千代田の役員、管理職、先輩社員のみなさんは、会社の経営理念を咀嚼することを常に心がけていただきたいと思います。そして、そのことを、自分の言葉を交えて日頃の部下後輩への職場指導の中で徹底していくことです。その結果、若い人が育ち、強い組織の千代田となっていくはずです。

感想・ご意見など ym2041@axel.ocn.ne.jp 迄、ご連絡いただけたら幸いです。

海賊からの便り－14

2014/8/01

藤の花と蔦の一葉が命を救った
～水と植物の21世紀～

宮下佳廣

姫路にゆかりのあるNHK大河ドラマ「軍師官兵衛」が佳境に入ってきています。数多くの見せ場がある中で、私が印象に残っているのは、荒木村重の説得に失敗し逆に有岡城の土牢に幽閉されているシーンです。濠に接しわずかな陽射ししか入らない土牢の中で、次第に衰弱していく官兵衛を勇気づけたのは、牢の鉄格子に巻きついた藤の蔓(つる)でした。やがて藤は、太陽の光と濠の水の力で薄紫の花房をつけるまでに成長してゆきます。官兵衛はこの藤の生命力に力を得、自らを奮い立たせ、生き延びて救出された後、このことを生涯忘れないように黒田家の家紋を「藤の花」としました。

アメリカの小説や研究事例の中にも同様のことがみられます。『最後の一葉』(オー・ヘンリー著）という短編です。主人公のジョンジーは肺炎におかされ、アパートの窓から見える塀をつたうアイヴィー（蔦）が紅葉しては枯れていく姿に自分を重ね、次第に生きる力を失っていきました。ところが、ある晩大嵐が来て、夜通し強い雨と風が吹きつけたにもかかわらず、翌朝、塀に一枚の葉が残っているのを見つけ、勇気づけられ回復していきます。実はこの一葉は友人の老画家が嵐の夜、雨に打たれながらジョンジーのために描いた一葉でした。ちなみに画家は嵐の中の作業の無理がたたり命を落とします。又、世界的な学術雑誌「サイエンス」（1984年）にアメリカのヘルスケア学者が発表した研究があります。それは、外科手術後の患者を、窓からレンガ塀しか見えない患者と、落葉樹の緑が見える患者に分けて検証したものです。緑の患者はレンガの患者に比べ退院までの日数は短かったことが報告されています。この後、アメリカ国内では、患者がベッドに横になったまま窓から緑が見える病院の建設が進められたといわれています。

21世紀は水の世紀とよくいわれますが、植物の世紀と呼ぶ学者もおります。食糧問題、バイオテクノロジー等、身近な出来事からもそのことが実感できると思います。今回は、千葉大学園芸学部での私の研究から、植物と人間の関わりあいの中で、私達が目に見える植物の営みを受け入れることは、命の尊さ、生きる希望や勇気という「目に見えない力（スピリチュアリティ）」を植物から与えてもらっているという事例を紹介しました。

私たち人間も自然の一部であり、自然と共に生かされていることをあらためて認識することが、水と植物の21世紀を生きぬいていく源泉になるのではないでしょうか？時間に追われる毎日だからこそ、誰に愛でられずとも季節がめぐれば花を咲かせ実を結ぶ野の花に目をやり、心を解きほぐすひとときを日常生活の中に作る努力が誰にも必要だと思います。

ご感想・ご意見などをym2041@axel.ocn.ne.jp宛いただけたら幸いです。

海賊からの便り－15

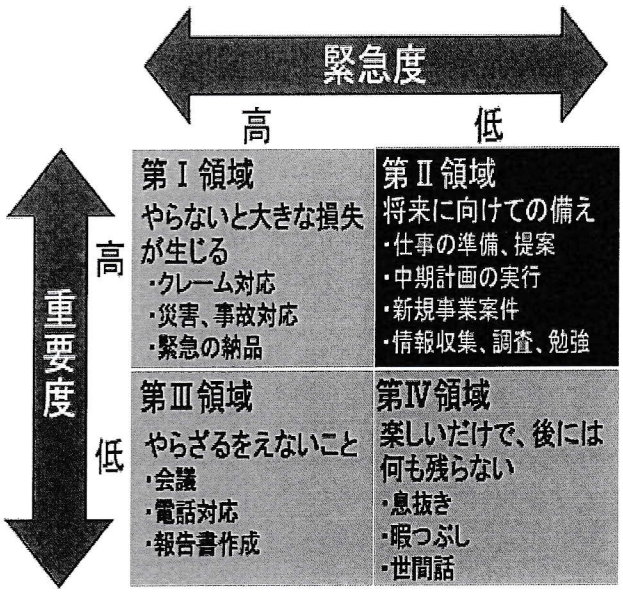
2014/09/01

大事なことを忘れていないか
～知的生産性を高める～

宮下佳廣

一昨年から、全体会議や営業所でお話をさせていただく機会があり、仕事の基本としての事実と意見の峻別、より良い人生をおくるための良き習慣については共感をもっていただきました。今回は、一度お話した中から、なかなか実行が難しい仕事の優先度について、再度、みなさんの理解を深めていただきたいと思います。

みなさんの日常の仕事を、緊急度と重要度の高低差による四つの領域に分けてみると、仕事の優先度は第Ⅰ領域と第Ⅲ領域が高くなっているのではないでしょうか？



大事なのは第Ⅱ領域です。第Ⅰ領域へ時間を割くことは避けられませんが、第Ⅱ領域に時間を割くことによって第Ⅰ領域へ費やす時間が減らすことができます。クレームや緊急納品等をできるだけ少なくする日頃の仕事の準備や段取りを考えておくことです。そのことによりお客への価値ある提案を考える時間ができるはずです。

緊急度優先から重要度を忘れない仕事への切り替えには、企業活動の仕組み中に組み込む経営の力とみなさん一人ひとりの意思の力が必要です。まず、経営として直近の業務課題の進捗状況を確認することは当然のこととして、新しい提案、中期的な仕事、新規事業案件についても同様のウエイトでチェックし、評価をしていく仕組みを確立しておくことが必要です。さらに社員のみなさんが第Ⅱ領域にできるだけ時間を割けるように会議や資料作成についても見直していくことが必要となります。

このことに対応して、社員のみなさんは、毎月或いは毎週、第Ⅱ領域を考える時間を決めてみることです。思考能力が高まると言われる早朝の時間を割り当てる等の工夫も必要になります。その結果、仕事においても私生活においても大事なことを忘れずに成果を上げていけるはずです。意図的・計画的に知的生産性の向上に努めてください。

感想・ご意見など ym2041@axel.ocn.ne.jp 迄、ご連絡いただけたら幸いです。